

手づくり郷土賞^{ふるさと} 選定委員会

全体講評

手づくり郷土賞は、昭和61年度に創設以来、今年で28回目を迎えております。今年度も、全国各地から、数多くの取組の応募がありました。いずれの取組も、創意工夫に溢れ、地域の方々の郷土への熱い想いと地道な努力が伝わるものばかりでした。

今年度は、近年の傾向と同様に、河川や公園などの清掃活動や緑化活動による自然再生に関する取組が多くを占める一方で、都心部の賑わいづくりや古道整備などの取組についての受賞も目立ちました。このような変化は、新規投資の時代から、社会資本を維持管理・更新する時代へと移り変わる中で、既存の社会資本を如何に利活用して、地域づくりを図るのかへと、人々の意識も変わりつつあることを示しているようです。

また、一口に活動を行うと言っても、本賞の受賞案件の中には、社会資本の整備後から手を加えるのではなく、社会資本の整備段階から、行政と地域住民が協力しあって、成功している案件が多数存在しており、官民連携の進め方の一例を示しているといえます。

今後も、受賞された地域においては、活動に更なる発展に取り組まれるとともに、本賞の選定事例に蓄えられた叡智によって、魅力ある地域づくりが全国各地で展開されていくことを、選定委員会一同期待します。

選定委員講評

西村 幸夫 委員長

手づくり郷土賞の性格もこのところ新規のインフラづくりから古道の復活や山・川の再生などすでにあるものの掘り起こしに傾斜してきましたが、今年の傾向として、これに都心部の賑わいづくりや新しい発想からのまちづくりという視点の活動がいくつか加わったことが挙げられます。

たとえば、大賞部門の飫肥城下町の取り組み（宮崎県日南市）はタイトルそのものが「賑わいを今に」というものでした。町並みの再生や看板の統一といったハード事業にコンサートや廃油キャンドルによるライトアップなどのソフトな工夫が重なって来訪客の増加に寄与しているのです。一般部門でも、舟参宮の再興（三重県伊勢市）は「いにしへの川みなとに賑わいをつくる」がうたわれていますし、山形県鶴岡市のナイトバザールのデイバザールへの拡大展開は「商店街「みち広場」の整備と運営による賑わいづくり」がタイトルでした。

もうひとつの特色である新しい発想のまちづくりでは、大賞部門の黒塀プロジェクト（新潟県村上市）の取り組みが出色です。黒塀 1 枚千円から緑一円千円運動へと手づくりの市民運動がまちの景観をより魅力的なものへと変えているのです。一般部門では阪神大震災の被災児童の受け入れが自然や田舎の癒しの力の再発見につながった美瑛川さと川づくり（北海道旭川市）などにこうした新しい発想の芽をみることができます。

受賞された皆様、おめでとうございます。これからのますますの活躍を祈念いたします。

荻原 礼子 委員

今回の選定にあたり、この「手づくり郷土賞」

の意味について考えてみました。

地域団体が主に自力でつくりあげた魅力的な地域環境は、そのご努力についてももちろん大きな評価が与えられるべきと思います。ただこの賞は市民の環境形成に対する努力をたたえるだけでなく、「官民の協働により生み出された魅力的な環境」について、公共事業の目指すべき形として評価することに大きな意義があるように思います。

日本の地域では、使える予算もどんどん減ってきていますし、ハード事業だけでは地域の課題の解決がなかなかできないことも明らかになってきています。「何をすべきか」どの地域も模索している状況です。

今回受賞した事業の中には、公共事業を上手に活用して官民が地域や場の将来像や夢を共有して魅力的な環境を生み出し、さらなる魅力づくりに汗を流し、その場を使ったイベント等による地域おこしに発展させている例がたくさんありました。この賞で紹介された事業は、限られた予算で大きな事業効果をあげる知恵の宝庫だと思います。地域の個性や文化を育て、地域の人々のつながりを再生していくような公共事業のあり方のモデルとしてタンポポの種を飛ばし、他の地域に広がっていくことを切に願います。

齋藤 潮 委員

受賞者の皆様、おめでとうございます。「手づくり郷土賞」に毎年 40～50 件の応募があることに驚くばかりです。ふるさとを少しでもよくしようと働く人々は尽きることがない、ということでしょう。さて、受賞したとりくみの中でわたくしが最も印象に残ったのは「越後みしま竹あかり街道」です。里山維持のために伐採された竹を廃棄せず、芸術的なシーンの素材と

して活用するしくみは大事だと思いました。なぜなら、それは継続性と創造性のリンクを予感させるからです。里山維持だけなら、それ自体に意義があるとしても重荷になっていく恐れがある。ともすると特定の世代だけが関わり続けることになりそうです。しかし、伐採された竹で灯具をつくって展示するとなれば、その創造性の源泉としての伐採作業はいろんな世代に引き継がれていこうと思うのです。竹あかりづくりは幼い子供達も楽しめる。芸術家の卵や、時にはプロのアーティストが参加してホンモノを見せてくれる可能性もある。これらは伐採竹を必要とする積極的な理由になります。そのことが大事な里山管理に繋がる。まさに、ハレとケとが見事にリンクした「手づくり」の活動だと思えます。

佐々木 葉 委員

賞にはこれまでの蓄積と成果を讃えるものと、これからの可能性に期待を託すものがあると思う。手づくり郷土賞は前者が主たる対象となろう。大切なことだ。しかし、地域の人々が自らの手で、自らの地域を変えていくというそのチャレンジな活動は、たとえそれが小さなものであっても、現在の必ずしも順風満帆ではない国土や自治の形に新しい問いかけとなるのであれば、手づくり郷土賞として讃え、広く世に知っていただきたいと思う。奈良における古道の整備は、車を前提とした道のネットワークによる国土観へ一石を投じるものとして、私は高く評価した。地方でのまちづくりをお手伝いしていると、高々数十年、長くて百年程度の歴史しかない近代の文明装置で形作られた国土の底に、数百年から千年単位で続いてきた人々のくらしの知恵が脈打っているのを感じることもある。そういった資源を自らの手で掘り出して磨き、千年単位の故郷をつくっていく活動。今後もそういったダイナミックな創造的展望をい

だかせてくれる活動の応募を期待したい。

田中 里沙 委員

自然、文化、風土、伝統産業など、独自の資源を活かしながら魅力ある地域をつくる取り組みは、本賞の歴史とともに継続しながら進化し、発展していると感じました。ボランティアの方を中心に、川、堤防、公園、里山などの整備に力を入れる活動は、地域の多様な世代や立場の方をつないでいて、「せっかく取り組むなら、全力で楽しく」という思いが一つになり、圧巻の景観や魅力的な空間が作り出されることが素晴らしいと思います。

また、自らの手で、力をあわせて創出された場の価値をさらに高めていくためには、人が集まる企画やイベントが欠かせません。受賞団体は、独自の楽しい計画を日常的に考え、実行していました。地域の特性を踏まえ、人をひきつけて夢中にさせるような試みを考えるためには、その土地や関わる人々の深い理解や探求が必要だと思えます。

今後も、一時的な盛り上がりや集客にとどまらず、人と人、人と空間のコミュニケーションによって、長い時間軸で地域の構想を検討していくことを期待したいところです。応募案件全体から、世の中における「社会資本」の捉え方は法律で定められている以上に幅広く、多様なものと捉えられていて、ここにも未来への可能性を見いだすことができました。

田村 美幸 委員

今回で28回をむかえたこの「手づくり郷土賞」は、ここ数年で、行政投資型の社会資本整備事例から、地域住民参加あるいは、地域住民主体の社会資本整備や維持管理の活動事例へとはっきりとシフトしてきています。それは、住民が自分の住んでいる環境に関心をめぐらす余

裕が出来てきたからだと思います。そして自分達の環境を見つめ、自らがその環境を良くする活動に関わることによって、郷土が快適になり、美しくなって愛着が持てるようになったのでしょう。活動に参加することによって、地域の連体感を味わえ、その結果が目に見えると、それは楽しみとなってゆくのです。今回の入選事例の多くから、このことが読み取ることが出来ます。勿論、行政や専門家のサポートがあつてこそ、結果はより魅力的になるのです。みんな、その楽しみが分かってきたのだと思います。その自覚を持てた大人達が、その活動に子供達を巻き込んで、郷土を愛する心を育ててゆくのです。子供の時は別段興味が起きないかもしれませんが、彼等が大人になった時、そのようなまちづくり活動は、郷土愛となって想い出されることでしょう。

森反 章夫 委員

河川、堤防、道路など社会資本の武骨な行政の再整備に呼応して、住民の皆さんが結集し、花、松などを植える。イベントをおこなう。こうしたささやかな公民の連携が、武骨な社会資本を、景観として豊かなものに変えていく。この社会資本の変成、あるいは、住民による再確保こそが、社会資本の新しい在り方を問い続ける契機になる。社会資本は、身近であればこそ、住民の活動の場、舞台にもなるということを、思い知らされる。こうしたアダプト・プログラムの手法が、この国土の至る所でおこなわれていることの社会的な意義はおおきい。

今回の応募のなかには、自然に帰ろうとする「古道」を市民が甦らせ、再生させたプログラムがあった。便利とか、効率とか、使用頻度などの近代的基準では到底理解しがたい所業である。だが、社会資本の原型とはなにかを一挙に明示する。その古道を辿ることは、道を創り出し、維持していくことと生活の在り様との密接

な関わりを伝える。

おもえば、手づくり郷土賞に応募される活動の多くは、社会資本としての港湾、河川敷、道路などを市民住民の側に引き寄せようとする試みに満ちている。その工夫の多彩さを許容することが、あすの社会資本の在り方を示唆している。